

# 「家がいいね」 第173号

いせ在宅医療クリニック 広報月刊紙

2018.10.9



名月をとってくれろと泣く子かな 一茶

中秋の名月は9月24日とか、なぜか25日の満月の1日前でした。この写真、泣く子に代わり剣玉の先で取った見立てです。少し早めの13夜ぐらいの月齢ですね。週末から台風が来て名月も危うい気配でした。月は変化とつきまとう存在です。太陰暦の朔日は、姿が見えない所から始まる時間のスタートですね。照らされ照らず、月の一句を。月光にいのち死にゆくひと寝る 橋本多佳子 もう一晚を生きて過ごせるように祈る意とか。

主役以上の希林さん

3年前の正月の新聞広告に驚きました。ハムレットの狂女オフィーリアを描く名画に希林さんが扮してました。題字に「死ぬときぐらい 好きにさせてよ」 続く文字を少し見にくいかもしれませんが引用してみました。生き続ける技術が進歩して、死を疎んだり焦らせる世の中と言います。死んだら宇宙の塵ですが人体は全て星の借り物でも人生の構成の仕方は多様だと思えます。希林さんは、「いつでも好きにしている」と笑い、乳がん全身転移と付き合ひ仕事をし、最期は自宅へ戻った手練れでした。



人は必ず死ぬというのに。  
長生きを叶える技術ばかりが進化して  
なんとまあ死ににくい時代になったことでしょう。  
死を疎むことなく、死を焦ることもなく。  
ひとつひとつの欲を手放して、  
身じまいをしていきたいと思うのです。  
人は死ねば宇宙の塵芥。せめて美しく輝く塵になりたい  
それが、私の最後の欲なのです。

秋の祭りを歩く

週末ばかりを狙う台風が日本海に抜けた7日の日曜。降りた津駅は、ロータリーが祭りの会場。大旗を持ち、揃い衣装の踊り子たちが疾駆し移動していました。帰路に降りた伊勢市駅の前からも歩行者天国が続きます。午後5時前、祭りの興奮の余熱があり、子どもの姿も多く見かけました。向こうから声を掛けられる機会もありました。名前は直ぐに思い出せません。顔に憶えがあっても、相手に名乗ってもらおうと嬉しい私です。ハッとしたのは、遺族のお母さんからの声かけでした。

カルテからのつづき 3

26歳脳腫瘍のその人には、家族と生活する貴重な4カ月の在宅時間でした。意識障害があっても言葉が喋れなくても体には気持ちに通う方法が残されています。私もお母さんと短い挨拶をした後で、

その人が生きてくれた期間への記憶が思い出され、この絵本が浮かびました。1977年の初版。

猫は多くの飼主に愛されても、その生活は嫌いで何度も死に、生き返ります。野良猫になり自分が好きになりますが高慢で他の猫に興味を持ちませんが、まだ1回も生きていない雌猫に惹かれ、子をなします。「あいつらも、立派な野良猫になったなあ」と呟くときは、どうぞ一読下さい。



自宅での人生を  
最期まで支援します

〒516-0805  
三重県伊勢市御園町高向 927  
電話 0596-20-8104  
ファクス 0596-20-8105

メール [homecare@kr.tcp-ip.or.jp](mailto:homecare@kr.tcp-ip.or.jp)  
ホームページ <http://isezaitaku.com>

↑バックナンバーはここで閲覧可